

2005年度 子ども教育研究所事業報告
講演会・シンポジウム報告

- (1)「シュタイナー教育フォーラム」
(2)「第4回 CREATIVE 保育講座」

山本裕之
YAMAMOTO Hiroyuki

子ども教育研究所は2004年4月1日に教育研究センターのひとつの研究所として開設した。発達教育学部児童教育学科に併設され、所長は児童教育学科学科長が兼務している。研究所には幼児教育部門と初等教育部門があり、学科専任教員からの研究員と学外からの客員研究員で構成されている。

2005年度の事業として、第1回は初等教育部門、第2回は幼児教育部門が担当した。

(1)「シュタイナー教育フォーラム」

日時 2005年4月30日(土) 13:30~16:45
会場 神戸親和女子大学 4号館 421号教室
プログラム

1. 開会挨拶

神戸親和女子大学長 山根 耕平

2. 基調講演

講演者 Diana Hughes (ダイアナ・ヒューズ) 氏
(シュタイナー教育養成学校代表)

通訳 瀬尾 修 氏
(本学教授)

3. シンポジウム

「シュタイナー教育の現状と課題」

ー日本におけるシュタイナー教育の意義ー
パネラー

Diana Hughes (ダイアナ・ヒューズ) 氏
中村 真理子 氏
(京田辺シュタイナー学校教員)
吉田 敦彦 氏
(大阪府立大学助教授)

コーディネーター

山崎 英則 氏
(本学教授)

通訳 瀬尾 修 氏
(本学教授)

4. 閉会挨拶

子ども教育研究所長 山本 裕之

(2)「第4回 CREATIVE 保育講座」

日時 2006年3月11日(土) 13:30~16:30
会場 神戸親和女子大学 4号館 411号教室
プログラム

1. 開会挨拶

子ども教育研究所長 山本 裕之

2. シンポジウム

○話題提供①「親・家族・地域との連携と保育」
原田 壽美子 先生(頌栄保育園長)

○話題提供②「保育における親参加と親育ち」
渋谷 千加代 先生(明石市立朝霧幼稚園長)

○話題提供③「子育てする親の気持ちと園との
かかわり」

鉄川 典子 氏(幼児保護者)

○話題提供④「これからの保育と幼児教育・保
育施設の役割」

濱名 浩 先生

(立花愛の園幼稚園長・本研究所客員研究員)

◎コーディネーター

寺見 陽子 氏(本学教授)

3. 講演

「子ども・親・保育者ーその連携と援助・教育」
講師 寺見 陽子 氏(本学教授)

上記の講演会及びシンポジウムについて、その概
略を報告する。

(1)「シュタイナー教育フォーラム」

以下、本学児童教育学会発行の「教育のひろば」
第19号(2006)の「シュタイナー教育フォーラム」
報告：山崎英則(本学研究員)【著】より引用す
る。

「シュタイナー教育フォーラム」

山崎 英 則 (本学教授)

2005 (平成17) 年4月30日 (土)、「日本におけるシュタイナー教育の意義」についてのフォーラムが開催された。前半ではダイアナ・ヒューズ先生の基調講演が行われ、後半ではシュタイナー教育についてのシンポジウムが開かれた。

ダイアナ先生の基調講演から、シュタイナー教育が六つの課題に取り組んでいることが理解された。

1. 幼児期に対する権利を提唱している。子どもの幼児期は、現在、大人たちによって「早く大きくなりなさい、早ければ早いほどいい」との観点から、その時期に十分な時間をかけ発達を見守ることなく、発達そのものを消滅させている、否、略奪している。子どもを健康にする最終目的に到達させるためには、その時期に実際に必要としている時間と空間を提供しなければならない。
2. 独創的な人間観である、肉体、心、霊、それらの層に属している意志、感情、思考が相互に深く関わっていること、丁度いいことを丁度いい時期に与えるという考え方、そして、感情的な知性を重視すること、を提唱している。
3. 活動的な内的生活をアピールしている。現在、われわれが日頃から行っている人間生活を分析するとき、外部の様々な影響により、疎外されて生きている場合が少なくない。一人静かに自己と対話しながら、沈思黙考することはほとんどできなくなってきている。今現在、遠ざけられ隔離しているゆえに、内的生活をすること、内的人間になること、内から発達することが重視されてくる。
4. 型と自由のバランスを提示している。型と自由とは左と右の極に存在する要因であるが、いずれか一つを目指すのではなく、両方を目指すべきであり、そしてさらに、これら二つの側面の一つから他方へというふうに、非常に美しい形で実践していくべきである。
5. テクノロジー (コンピュータ) 時代の最後の砦になるべきであることを主張している。子どもの心をテクノロジー (コンピュータ) にあまりにも早い時期に 遭遇させれば、本来ゆっくりと発達している心にとっては大きな障害となっ

てしまう。子どもの場合、与える最良の時期があることを指摘している。

6. 9歳になるまで、内的なものとの区別の付かない子どもを環境から切り離してはいけぬ。なぜなら、子どもは環境と完全に一体化しているからである。自然に対する驚き、畏敬、感謝の念が、自ずと子どもの中に芽生えるように仕向けるようにしなければならない。

現在、シュタイナー・ヴァルドルフ教育が始まって、85年になる。今では、48カ国において1000近くの学校が存在する。非営利で、宗派に属さない教育運動として、従来の教育目的、子供観、そして、人間観に対して挑戦し続けている。

なお、ダイアナ・ヒューズ先生はカナダのトロント大学の教授でルドルフ・シュタイナー・センターに勤務され、ホリスティック教育の代表者の一人である。

数分間の休憩後、シンポジウムが開催された。パネラーは、吉田敦彦先生、中村真理子先生、そして、基調講演をされたダイアナ・ヒューズ先生の三人であった。なお、コーディネーターは、本学の山崎が勤めた。

まず、トロントのシュタイナー学校でフィールドワークを通してホリスティック教育を研究されている吉田先生は、シュタイナー教育の特徴を紹介された。①エポック授業を行っていること、②多様な教科目が統合された内容が学習されていること、③全人的な学力が付けられていること、などを。

次に、エマーソンカレッジ基礎コース・教員養成コースを修了され、現在、京田辺シュタイナー学校の教員である中村先生は、シュタイナー教育の実践を披露された。要約すれば以下の通りである。①教師は子ども観に関しては共通のものをもっている。②教師が教える内容は教師に任されている。③時間を区切るチャイムはない。④教育は子どもの成長段階に合わせたもので、ゆっくり学ばせ、ゆっくり感情に働きかける。⑤子ども一人ひとりが大事にされる。⑥子どもの心を動かし、子どもの心を生き生きさせる。⑦教科書はなく、教科書は自分で作っていく。⑧算数では、四則計算など、身近な自然と結びつけながら理解させる。そして、それと同時に、その秘密や美しさ、驚き

などを発見させる。⑨ 知識・思考を実際の生活の中で生かしていく。⑩集中と拡散の原理に基づいて、内側での充実と外側での充実、静かな時間と広がる時間にリズムをつける。

そして最後に、ダイアナ先生は、上記の基調講演の中の第五番目の挑戦内容を普遍化された。①コンピュータ危害は、肉体的な危害であり、感情的な発達危害であり、社会的な発達の危害であり、道徳的・人間的発達の危害であること、②幼児は共同生活から隔離してはならないこと、③幼児は商品化されてはならないこと、を。なぜなら、幼児教育にとって重要な事柄は、知的好奇心であり集中力であるからである。

三人のパネラーの内容に関してフロアーから質問があった。口火を切られたのは、本学の丹野眞智俊教授である。中村先生に対して、日本語で表現された音に対する印象は諸外国語でも同じであるのかどうか、そして、日本語の濁音・半濁音はどんな感じの音になるのか、と。中村先生は、母音の場合は普遍的なものがあるが、子音の場合は使われ方が違うので違いもあるが、しかし、子音でも共通のものは共通ではないかと思われる、と答えられた。

そして、本学の櫻本明美教授から、中村先生とダイアナ先生に対して、物事に感じる心、感性を身に付けるために心掛けておられること、そして、シュタイナー教育のカリキュラムの例について教えて欲しいとの要望があった。ダイアナ先生はひたすら練習することであること、そして、描いたイメージを子どもにイメージ化するとき、悟るときや開眼するときを大事にすること、教師が内的な絵を描くことによって子ども達へのスクリーングという目的を達成することができる、と答えられた。そして次に、中村先生は、絵をしっかりと自分の中に持つこと、自分がまず内的な静けさを持つこと、子どもの模倣衝動の力を活用することが重要であると答えられた。

さらに、加古川市にある別府幼稚園の三柴園長から、中村先生とダイアナ先生のお話を聞かれ、次のような感想を述べられた。すなわち、子ども達のすばらしい感性に伝えていくために、教師は感性、五感を研ぎ澄ましておかなければならないこと、子どもの心と教師の心とが響き合う教育、子どもの心に響く教育をしていくことが大切であることを。

最後に、本学の児童教育学科長の山本裕之教授は、基調講演者、パネラー、参加者全員に対して、心からのお礼と労いの挨拶をされた。

なお、ダイアナ・ヒューズ先生の通訳は、本学の瀬尾修教授であった。

(2)「第4回 CREATIVE 保育講座」

「子ども・親・保育者—その連携と援助・教育」

本学に、子ども教育研究所が発足して2年が経過しました。本研究所では、子どもと保育に関するさまざまな今日的課題をテーマにして、研究会を行ってきました。今回は、「子ども・親・保育者—その連携と援助・教育」をテーマに、これからの保育・幼児教育の方向性を探ってみたいと思います。

核家族化・少子化が進行し、子どもも大人も人としての育ちを支える人間関係が危うくなっています。そうした中で、少子化への対策とともに地域や家庭の教育力の再生が叫ばれ、子育て支援への取り組みが始まり10年が経過しました。エンゼルプランから新エンゼルプラン、次世代育成へと国の施策も転換し、その中心的な役割を果たしてきた保育所・幼稚園での子育て支援は子どもの保育のみならず、親支援、家庭・家族支援、地域支援を視野に入れた保育へとその視点が広がってきつつあります。

そうした中で、真の「子どもの育ち」「親の育ち」を見据えた保育を常に問い直す必要があるでしょう。人の「育ち」を支える発達環境としての保育所・幼稚園は、これからどのような視野を持った保育実践が求められるのでしょうか。「親や地域との連携」と「育児力の育成」をキーワードにして、これまでの保育・子育てへの支援を見直しながら「子育て・親育ち」を再考してみたいと思います。

上記の主旨に沿いながら大変有意義なシンポジウムが行われた。なお、詳細については、本学児童教育学会発行の「教育のひろば」第20号（2007）に「第4回 CREATIVE 保育講座」の報告として、掲載予定である。